

再チャレンジ懇談会の概要

1. 稲田再チャレンジ担当大臣冒頭挨拶

何度でもチャレンジをする、失敗しても、仕事を辞めても、チャレンジするということを応援する再チャレンジ支援は安倍内閣の重要施策課題です。再チャレンジ担当大臣として「若者・女性活躍推進フォーラム」を開催し、第一線で活躍されている方々の声も聞きながら、若者や女性の再チャレンジを含む支援策を推進するための提言を取りまとめたところでございます。

また、今回の「日本再興戦略」においては、ニートや障害者の社会参加のための施策や、一度事業に失敗した方の再出発を促すための施策も盛り込んだところでございます。人生の様々なステージにおける再チャレンジを支援することが重要ですし、日本全体が再チャレンジしていく、また、再チャレンジしようとしている方々を応援しようという意識になっていくことが非常に重要です。

本日は、実際に再チャレンジを果たし様々な分野でご活躍されている方々から、貴重な体験談や御要望を伺うこととしておりますので、皆さん方から忌憚のない御意見をお聞かせ願いたいと思います。

2. 出席者からの発言

(近江正隆氏)

本日のテーマ「再チャレンジ」ですが、ぼくの人生は、挫折の繰り返しなのかも知れません。今年で43歳になりますが、東京目黒に生まれたぼくは、敷かれたレールに乗って順調に、都内有数の進学校である都立戸山高校に、入学しました。でも毎日の通学で、過度の人混みに疲れてしまいました。卒業したら田舎で暮らしたい。19歳のときに、単身北海道・十勝に渡りました。1年間酪農の仕事を手伝い、その後、漁業の仕事に着きました。17年間、漁師として生計を立てました。ちなみに漁業の仕事をさせてもらうまでには、2カ月の放浪生活がありました。

漁師の仕事をしながら、ぼくは、自分でとった物を自分で加工し、自分で販売しました。いまでいう六次産業です。ぼくがはじめたのは、いまから14年も前のこと。インターネットで販売しましたが、じつによく売れました。売れた時は1日に数百万も売れたほどです。ちなみに放浪の末にたどり着いた時のぼくの所持金は50円、そこからのスタートでしたから、当時はテレビや雑誌に取り上げられ、正直有頂天だったと振り返ります。でもいまは、漁師も水産加工もネット販売もしてはいません。なぜなら、ぼくはまた違った意味での、大きな挫折を経験したからです。

転覆事故。それが大きな転機でした。死に目に遭うことも、大きなショックでしたが、それ以上にショックだったのが、仲間の漁師たちに、命を救われたことでした。協同の

精神に背を向け、事業を展開している、生意気なぼくへの温かい心遣いが、ぼくに大きな気づきを、与えてくれました。自然と対峙した営みである農林漁業は、努力が報われないことだらけです。台風・嵐など、自然の前では日々挫折の連続と言っても過言ではありません。自然の前では人間は小さな存在、でもそこで暮らしていると「困った時は仲間を助ける。」「互いに支え合う」それが普通にできるんだって、ぼくはそこで命を救われたんだって思いました。自分の利益ばかり、自己の経済的なメリットばかり考えていた自分が恥ずかしくなりました。ぼくは、人として大事なこと、ひとりでは生きていないことを学びました。それがぼくの人生最大の気づきです。でも一方で、それまでのぼくにとっては、大きな挫折になったと言っても間違いのないと思います。「ひとりでは生きていない」という気づきは、ある意味大きなショックでした。

でもそこからぼくは大きく変わったと思います。他を認め、社会との関わりをより意識するようになりました。命や命の糧「食」の大切さ、それを生み出す農林漁業の価値について考えるようになりました。都市と農山漁村の双方の良さを知るぼくだからできることがあるはず、そう思って活動の軸を180度変えました。

どんなに偉くなっても、どんなに強くなっても、残念ながら自然にはかないません。空気・水・食物がなければ生きていけない。そして食物とは他の命であることを意識するようになりました。他の命をいただき、ぼくは命を次につなげています。そしてぼくは、ぼくの父さん母さんから命を受け継ぎ、今があります。なにひとつとして自分だけで成り立っていません。だれ一人として、自分ひとりで生きていないのだと思います。先の震災でも、多くの人がそう感じたのだと想像します。正直、この価値観と向き合うには勇気があります。自分ひとりで生きていないなんて簡単に認めたくないし、そんな風に思うと不安で、怖くて仕方ありません。でもぼくはそこから逃げることは、もうないって思います。どんなにこれからまた挫折したって、ぼくはまたすぐ這い上がる自信があります。怖いことだけど、「自分ひとりで生きていない」そのことを真摯に受け止める力こそ、「生きる力」というものではないのかと思うのです。そしてぼくらには、授かったこの社会や命のつながりを次につなげていく義務があります。つぎの世代、つまり子どもたちにつなげていくことこそがぼくらが生きる意味だと信じたいです。

自分ひとりで、生きていないからこそ他との関わりを感じることができ、支え合い、助け合う必要性も共有できます。思いやり・感謝の気持ちも育めます。またひとりで生きていないからこそ他人に迷惑をかけないように努力し、自分を磨き、ときに競争して、互いに高め合っていくことが必要となってきます。競争と協同、ときに相反するようにとらわれがちですが、「ひとりで生きていない」を心の軸と置くことで「競争・協同」が心の中で共存できる。このバランス感覚を得られたことが、今のぼくの一歩の誇りです。

安倍総理のオフィシャルサイトの中の「教育再生」ページにこんなことが書かれています。「他人を思いやる心を育むために、道徳教育を充実させます。生命の尊厳、社会へ

の主体的な参画などの重要性についても、教えることになっています。」

またぼくが尊敬する故安岡正篤氏の言葉にもこうあります。「現代の危機を克服する者は、結局、教育学問であります。徹底的に言えば、我々が今日誇っておる、科学や技術や産業の発達と匹敵するような道徳的、精神的、人格的発達が無ければ、この文明は救われないのであります。」と。

さらに安岡先生は、講演の中で「都市化の過度の集中が、国家崩壊を招かない例はない。人類発展の過程でどうしても現れる都市文明というものの危険性、これを救済にあたるのが、農村の最大の使命である」と。

農山漁村は、社会が持続していくために大切な学びの場です。ぼくは身をもってそれを経験しました。都会生まれのぼくが「生きるために大事なこと」を学んだ場所は農山漁村でした。農山漁村にある自然・自然と対峙した営み・そこで生きる人たちとのふれあい、これは学校での座学では学べない大事な「学びの資源」です。単に農山漁村は生産するという、経済行為を行うだけの場ではないことを多くの人たちに分かってほしいと思います。ぼく自身現在、それを伝え、発信するために「体系的に位置づけた農村生活体験」を軸とした様々な取組を地域の自治体職員や教員や農業者などの仲間たちと行っています。また農水省の事業や文科省の食育有識者会議のメンバーにもならせていただいておりますが、今こそ省庁を超えた「生きる力を育む」という教育面からの農村の価値・役割についてあらためてご検討いただきたいです。そしてぜひぼくに具体的事業を展開することのお手伝いさせてください。「美しい国、日本」になるために。

(尾野山陽氏)

私が今日皆様にお伝えしたいことは、自分が“再チャレンジ”を実現するにあたって、周りのサポートがある環境がどれほど重要であったかということです。

私は約5年間のひきこもりを経験しています。中学生の頃に受けたイジメが原因で人間関係が苦手になりました。なんとか高校を卒業し、彫金関係の専門学校に入学しましたが、几帳面な性格から自分の作品がどうしても好きになれず、周囲と比べては落ち込み、不登校になり、学校を辞めてひきこもりになりました。

しかし、ある時から、将来に不安を感じ始め、ひきこもっていた自分を悔やみ、毎日のように泣くようになりました。

そんな日々を変えるため、まずは求人広告を見て仕事を探しましたが、目に見えない不安に押しつぶされ、無理に電話をかけようとしても、電話をかける事が怖くボタンを押す事も出来ない状況だったので、学生の頃におろそかにしていた勉強を小学校レベルから始め、あえて人の多い場所に行き、人ごみに慣れる等、自分なりに考え社会復帰を目指していました。

そんなとき、母から、働かなければならないと思っけていても一歩が踏み出せない若者を支援している「地域若者サポートステーション」の話聞き、一人で就職を目指すの

も難しい状況だった私は、川口市にある「地域若者サポートステーション」に通うことにしました。

最初は、個別相談に加えて少人数での発声練習からはじめ、大人数でのグループ活動、ビジネスマナー等を学びました。若者サポートステーションのサービスを一通り利用し終えた頃、Microsoft の Office を学ぶパソコン講座が始まり、社会に出てから必要なスキルを学べると思い、セミナーに参加しました。その後、若者サポートステーションの方から職場体験で Microsoft 行ってみないか？というお誘いがあり、大企業で働く経験ができる滅多にないチャンスだと考え、思い切って参加する事を決めました。

職場体験では Microsoft の営業部門でパソコンの取扱店を回り、冊子を売り場に展開し、販売員様に製品のセールストーク等をお伝えする業務を経験させていただきました。販売店を回るときは社員の方と一緒に行動をさせていただき、オフィスに戻ってからは、社員の方々と振り返りを行いました。完璧主義なところのあった私ですが、ベテラン社員の方でもうまくいかないことがあることを目の当たりにして、いい意味での割り切りができるように成長できました。後日お聞きしたのですが、受け入れを担当くださった社員の皆様は、本当に真剣に準備をしてくださり、期間中も個別で話を聞いてくださるなど、私の成長のために多くの時間を割いてくださったとのことでした。また、職場体験中も若者サポートステーションにはいつでも相談できることも心強かったです。

職場体験終了後、お世話になった会社様からアルバイトから始めてみないか？と言うお話を頂き、約1年半かかりましたが就職をする事が出来ました。現在は契約社員となり、今も正社員へのキャリアアップや起業を目指し、学び、働き続けています。

この経験で私が学んだのは、自分が動けば周りも合わせて動き出すという事です。ひきこもっていた5年間は、時間が止まったように何も変化の無い毎日でしたが、どんな小さな事でも「何か」を始めると、必ず周りも動き出し、変化が起きます。いきなり就職をめざして一步を踏み出すには、物凄い勇気と力が必要になります。しかし、社会復帰=就職活動とは考えず、まず自分に合った一步を踏み出すところから始めることが大切です。私の場合は、その一步が「地域若者サポートステーション」に通う事でした。とても小さな一步かもしれませんが、引きこもりだった私にとっては、Microsoft へ、そして社会と自分をつなぐ大きな一步でした。

今まさに渦中にある若者たちに伝えたいことは、自分は決して一人ではないと言う事を忘れないで欲しいということです。素直に真っ直ぐ頑張っていれば、困った時に必ず誰かが手を差し伸べてくれます。それは家族や友達、あるいは顔も知らない人かもしれませんが、人間はどこかで繋がり支え合って生きています。何事も恐れず、まずは自分の一步を踏み出して欲しいと思います。

そして、今日この場で話を聞いて下さっている政府の皆様には、若者たちを一人にしない環境を作っていただきたいことをお伝えしたいです。誰かが手を差し伸べ、受け入れてくれる環境が整っていれば、“一步を踏み出す”ことを躊躇している若者たちに対し

て、より大きな可能性が開かれると私は実感したからです。私のご報告は以上です。ありがとうございました。

(大日方邦子氏)

大学時代にパラリンピックにアルペンスキー選手として出場しまして、世界の大舞台で真剣に勝負する競技のおもしろさに魅了され、卒業後も仕事をしながら、パラリンピックに挑戦し続けて、20年間の競技生活の中で5回パラリンピックに出場し、10個のメダルを獲得することができました。

パラリンピックは現在ではオリンピック同様、いわゆるエリート競技と言われておりますが、私自身は、スポーツエリートと感じたことはありません。といいますのも、3歳の時に交通事項に遭って、右足を膝の上から切断し、左足にも重い障害が残ったため、本格的にスポーツに取り組む機会がなかなか得られなかったからです。

義足や車いすを使いながら生活をした子供時代は、時には深刻ないじめを受けたり、難しい人間関係で悩んだりと壁が大きかった時代だったと感じています。大変幸いなことに私の両親は、障害があるからといって人生をあきらめる必要はない、色々なことを工夫して努力していけば、できることは絶対あるという強い信念を持って教育してくれました。そのお蔭で、困難もありましたが、乗り越えることができたと思います。さらに、17歳の時に心から打ち込めるスポーツに出会えたことで、前向きに生きていくエネルギーを今でももらっています。

本日は、私の二つのアイデンティティーである、アスリートという部分と障害当事者としての視点からお話ししていきたいと思います。

まず、スポーツとは、己が立てた大きな目標、例えばパラリンピックで金メダルを獲得したいという目標に向かっていくために、いくつもの小さな目標を立てて、挑戦して、それを失敗し、また成功に向けて努力し工夫していく、そういうものだと思います。失敗のない挑戦はありません。挑戦と失敗の積み重ねこそ、スポーツの重要な価値を形成しているものです。たとえ己がたてた目標を達成できなかったとしても、心が負けなければ、更に次の目標に向かって再チャレンジするエネルギーを得ることができるものだと思います。

一方、障害当事者としての人生を考えますと、自己や病気で運動機能の一部を失い、今まで当たり前に行っていたことができなくなることで大きな挫折感を味わいます。自分ができないことがあるという辛い現実に加えて、多くの人が苦しむのが、自分一人の人間であることには変わりがないのに、何か障害者であるという烙印を押されてしまい、社会から疎外されてしまう、そんな違和感を持った時こそ、一番辛いと思う瞬間だと思います。

確かに、現実的な問題として、体に障害を持ちながら社会で生きていくということは、大変なことが多いと思います。これを挑戦ととらえて楽しんでいくことはできると確信

していますが、それには大きなエネルギーが必要です。私にとって、自分の中にエネルギーを注入する有効な方法の一つが「スポーツ」でした。体を鍛えることで体力をつけ、明確な目標を持つことで心にパワーが充電されます。

そしてこうした取組を多くの人に知ってもらい、例えばパラリンピックをたくさんの人に知ってもらい、見てもらい、そして応援してもらうことで、周囲の人たちから力をもらって、さらに生きていく力に変えていくことができました。

私自身の経験から、再チャレンジに必要なものは、まず、チャレンジする人の意欲や気力を自らのものとして引き出すチャンスをあげること、そして、周りの人は最初にチャレンジする人のやる気を妨げず、前向きに受け止める、そんな社会を醸成していくことが必要であると考えています。

チャレンジする機会の創出として、スポーツ用義足や車いすを助成していただく仕組みを作ることや、パラリンピックの映像を見ることでインスパイアされ、成功体験を共有するという、再チャレンジを妨げない社会環境の醸成ということでは、「ハード面」としての設備や仕組みについて、また、多様性を尊重しあう機運作りなど「ハート面」からの環境整備も必要だと思い、いくつか例を挙げました。

例えば、バリアフリーの街作りと言うことで、バリアフリーの取組は進んでいますが、ただ問題解決のためだけというよりも、もっと積極的な活用ができないか。例えばカナダのバンクーバーやイギリスのロンドンでは公共のバスに電動のスロープがついています。日本のバスは、スロープが付いていても手動式ですので使うためには時間と手間がかかってしまうのが現状です。そのため、他の乗客に対する遠慮の気持ちがあり、スロープを使うことをためらってしまいますが、簡単に出せる電動スロープならば車いすユーザーだけでなく、ベビーカーなどより多くの人が気軽に利用していましたが、日本での普及も期待したいと思います。

そして是非お願いしたいのが、私が取り組んでいるスポーツに関して、スポーツ庁を設置していただきたいということです。私はスポーツをしているつもりですが、どうしても障害者スポーツという枠組みとしてとらえられてしまいます。同じ競技をしているはずなのに、障害があつたり用具が少し異なるというだけで、管轄する団体も違ってきます。わざわざ細分化することで、不必要な壁が生まれ、人材面や財政面にも無駄が生じているのが現状だと思います。スポーツはすべて共通であるという視点に立ち、壁を取り払うことで、チャレンジしたいという人をより受け入れやすくなるのではないかと期待しています。

最後になりますが、失敗した、ドロップアウトした、障害を負ったということがあつても、それを理由にある種の烙印を押されてしまうことのない社会、そこからの前向きな努力が評価され報われる社会、そして再チャレンジを後押ししてくれる社会になっていくよう、日本の将来に対して期待をしています。

(兼松弘典氏)

最初に自己紹介を兼ねて、再チャレンジまでの道のりを説明します。1997年に大学を卒業して、地元福岡の大型ディスカウントストアに入社しました。そこでは、上司にも可愛がられ、次第に様々な仕事を任されるようになり、4年目には取引先との発注については、すべて仕切るまでに、業務を任されるようになりました。他方、その頃、小売業界の競争も激しくなり、それとともに、任される仕事も日に日に大きくなってきました。今、考えてみれば、適当に息を抜いておけばよかったのかもしれませんが、学生時代皆勤賞でおすなど何事も手抜きができない真面目な性格が影響したのかもしれませんが、任された仕事は、いつの間にか、自分の能力を完全に超える仕事が目の前に山積みされるようになり、気付いた時には、ある日、目が覚めても、ぼっーとしてしまっ、出社できなくなってしまったのです。

それからしばらくして借りていたマンションを引き払って実家に戻ったのですが、引きこもりになってしまいました。近くのコンビニで日用品を買いものする以外、外出できなくなったしまったと記憶しています。その当時でも世の中に戻りたいという気持ちは常にありましたが、その当時の私から見た世の中というのは、たとえて言うなら高速道路を行きかう車列のようで、そのスピードの中にもどのように戻ってよいか、分からなくなっていました。その時、心配した母親が区役所に連絡し、その紹介で、現在でいえば、地域若者サポートステーションに当たる若者の自立を支援する施設に行ってみることにしました。そこで、悩みを聞いてもらったりするうちに、段々外出ができるようになってきて、その頃、ちょうど時を同じくして、父親の取引先で、本日随行者でもありますが、現在の勤務先の社会福祉法人創生会の伊東理事長から、しきりと電話が来るようになりました。「軽く食事にかないか。」「一度、うちの施設に来てみないか。」など、やりとりを繰り返しているうちに、一度甘えてお世話になってみようかと思い、職場に行かせてもらうことにしました。

最初は職場で座っているだけだったのですが、たまたま私と同年の者がいて、現在は私の直属の上司ですが、彼に業務の説明を受けたりしているうちに、福祉・介護の分野というのは、非常にみなさんから感謝される良い仕事だなと感じまして、段々仕事が面白くなりました。実際に介護の現場では、高齢者の皆さんから「ありがとう、ありがとう」と言われるのですが、小売業の時代にお客様からいただいていた言葉と受ける印象が違いまして、逆に私の中にも「ありがとう」という言葉が芽生えてきました。

ここで、本気で働いてみようと思うようになり、その後は、もう毎日があつという間に過ぎるようになって、早10年が過ぎたというところです。

振り返ってみますと、引きこもりになってしまったときに、外出する気にさせるための出口となる受け入れ施設があることが、私にとって、大変重要だったと思います。そして、次に、働いてみないかとしきりに働きかけをしてくれる方、私にとっては、伊東理事長がその方でしたが、理事長と巡り合えたことが私にとっての大きな転換点になっ

たと思います。さらには、そこで、福祉施設で働く場合の様々な知識を教えてくれる上記や同僚に出会えたことが有り難かったです。こうした私にとっての大変幸運な巡り合わせがなかったならば、今、こうして元気に仕事していなかったのではないかと思います。

今回、この懇談会への出席に当たって、内閣府の方に伺ったところでは、先日取りまとめられた成長戦略では、私の再チャレンジへのきっかけを作った地域若者サポートステーションを更に充実させ、就労への橋渡しに限らず、その後のフォローアップをし、また、社会人の学び直しプログラムへの結びつけていくことになったと聞いております。私が経験した幸運なめぐりあわせを、国の成長戦略において、しっかりと制度化するというのは大変素晴らしいことだと思いますし、是非、早期に実現していただくように御願いをしたいと思います。

もちろん、引きこもりにならないことが重要なかもしれませんが、しかし、若いと、どうしても、心が折れることもあります。また、心が折れることになるかもしれないけれども、激務が続くような職場に飛び込んでみようと、チャレンジしてみることもあるだろうと思います。逆説的に聞こえるかもしれませんが、私は、今は、あの時、激務が続く職場に飛び込むチャレンジをしたこと、そして、刀折れ矢尽きて、引きこもってしまったことも、かえって良かったなと思っています。それは、私の福祉分野での再チャレンジを支えてくれた方々に巡り合うことができたこと、また、様々な立場の方々の立場や気持ちに立って、物を考えることができるようになったからです。そういう考え方が、現在の福祉・介護の現場で大変役に立っているのも事実です。

以上、私の拙い経験を紹介させていただきましたが、国の再チャレンジ支援のための施策推進に向けて多少とも役に立てれば幸いです。

(横田信一郎氏)

総理の施政方針演説において、下町ボブスレープロジェクトを取り上げていただいたことは、当初からプロジェクトに携わる者として、大変心強く思っております。

私は、先代である父親が昭和41年に一眼レフカメラのレンズ鏡筒加工、いわゆる光学機器部品の加工業として創業した「京浜精密製作所」に、高校卒業後に入社しました。1階が工場、2階が住居という典型的な町工場でカメラ事業の衰退後は半導体の製造装置の下請け生産に従事しながら、旋盤やフライスなどの工作機械の技術を身につけてまいりました。

ところが、折からの不況の影響で、私が父から経営を継いだ2008年には大手メーカーからの発注に異変が現れ、業績が急速に悪化し、事業の継続が困難になりました。何とか会社を存続させることができなかと頑張りましたが、残念ながら会社は2009年に倒産、私自身も父親の連帯保証人として、自己破産を余儀なくされました。

しかし、私には、ずっとやりたいことがありました。大手のメーカーの下請けではな

く、メーカーと対等な立場でのパートナーとしてのもの作り、すなわち、お客様が本当に喜ぶものを、こちらから提案して作りたいと思っていました。実は、すでに 1991 年頃から、京浜精密製作所の中に、自動車のアクセサリパーツを作る部門であるナイトペイジャー作り、高い品質や特注への対応力について評価頂き、事業としても軌道に乗っていました。

会社が倒産した後も、私はこの夢を追い続けたいと思っていましたが、夢の実現に向けて、再起を促してくれたのが、地元の先輩であり、現在、下町ボブスレープロジェクトのリーダーでもある、株式会社マテリアルの細貝社長でした。細貝氏は、苦しいときにいつも励まして下さり、今回、株式会社ナイトペイジャーの再出発に当たり、経済的な面も含めて、全面的に支援して下さりました。

おかげさまで、現在は自動車のアクセサリパーツの商品開発や製作を中心にやっておりますが、障害者の方が快適に運転を楽しむための福祉機器の開発や製作にも力を入れております。また、最近では、日産やバンダイナムコとのエコ関連での共同事業に取り組んでおります。さらに、下町ボブスレープロジェクトには、構想段階から参加しており、大田区のもの作りを盛り上げていこうと考えております。

今ここで当時を振り返りますと、小さい頃から面倒を見てくれた従業員のこともあったので、父から引き継いだ会社をなんとか倒産させずに再生させたいと頑張っていた頃、金融機関はまともに相手にしてくれませんでした。また、商工会議所の中小企業再生支援協議会や地元大田区のあらゆる相談窓口にご相談に行きましたが、中小企業診断士を紹介するだけで、診断士は決算報告書を見るだけで事業内容や戦略については、なかなか説明しても分かってくれませんでした。そんな中、たまたま知った板橋区の企業活性化センターの中嶋氏は、親身になって相談に乗って下さり、相談のみならず、「一人で悩むな・不安なら金融機関や税務署にも同行するよ」と言って下さり、話をきいていただくことだけでも、精神的にもとても助かりました。単なるアドバイザーではない、こうした寄り添い型の相談窓口の整備は、若者・女性活躍推進フォーラムの提言や成長戦略にも触れられているようなので、ぜひお願いしたいです。

また、私の場合、細貝氏をはじめとする方々の支援があったから再チャレンジを図ることができましたが、未だに金融機関からの融資を受けることはできません。したがって、日産自動車さんやバンダイナムコさんとの取引においても、材料の仕入れについて非常に苦勞しております。政府の成長戦略では、経営者本人による本人保証の在り方を見直しする等の再チャレンジ支援が盛り込まれていると聞いております。大変有り難いと思いますが、これを迅速に進めていただいて、真面目に事業再生に取り組む中小企業への支援をお願いします。

最後に、細貝社長もよく言っていますが、大田区は醤油の貸し借りが隣同士でできる素晴らしい街です。いま、横の連携が広がっており、その一つがボブスレーです。世界一を目指してボブスレーの夢を追う下町の中小企業が、これからも元気に活躍できる社

会を構築していただきたいです。

(内田由紀子氏)

私自身は日本文化と心について、文化心理学という立場から研究を続けてきました。その中では、日本になぜニート、ひきこもりが多くなっているのかという問題があり、これについては世界各国の関心も高いという事実があります。

私は以前、ニート、ひきこもりのリスクについての尺度を開発したことがあります。そこで分かったのは、3つの要因があるということです。その一つ目がいわゆる「フリーター生活志向」、たとえば、仕事がしんどければ無理をせずやめた方がいいんじゃないかという傾向です。二つ目が、「自信や自己効能感が低い」という傾向で、たとえば知識や技能が低い、自分にはコミュニケーション能力がないのではないかという不安を抱えているということ。三つ目が、「将来に対する目標が不明瞭であり、何がしたいのかよく分からない」というものです。この三つの要因がそれぞれ関連し合いながら、ニート、ひきこもりのリスクを形成しています。

ニート、ひきこもりになるリスクの高低による動機付け（やる気）要因の違いを検証したことがあります。するとリスクが低い人たちは失敗した後にむしろやる気になり、もう一度チャレンジしてみよう、失敗を糧にして頑張ってみようとするのがわかっています。これは実は日本的な特性として知られています。一方で、リスクが高い人たちというのは、失敗後にはやる気を失ってしまいます。成功すると頑張れるのですが、むしろ失敗するともうダメだと思ってしまう傾向があるのです。失敗より成功に動機づけられるのは、実は日本に典型的な傾向ではなく、むしろ北米やカナダでよく見られる傾向にあることも分かっています。しかし、ニートやひきこもりが北米で多く見られるわけではありません。

そこで北米と日本の社会の行動の違いということを考えてみたいのですが、北米では、ユニークネス志向が強く、自分の才能や特性に注目をさせて、自分ができることを一生懸命伸ばしていこうとする社会の仕組みになっています。つまり得意なことを伸ばしていく社会で、スペシャリスト型であるといえます。一方で、日本社会は横並び志向、努力志向でして、できなかったことを頑張る、苦手なところを引き上げて、万遍なくできることを求める仕組みになっています。学校や企業内の教育でもそういうトレーニングが行われています。そう考えると、失敗時にやる気を失ってしまうような傾向は、今の日本社会ではなかなか馴染めないことになってしまいます。

そこで、これからの社会や企業に求められることとしては、ジェネラリストはもちろん重要ですが、それだけではなく、スペシャリスト型志向の人材も活用していくことが必要はないでしょうか。たとえば、若者や女性ももちろん含めたような、多用な人材を受け入れる企業、社会風土の形成が必要になってきます。また、減点方式から加点方式へのシフトも必要です。何かミスをすると罰を受け、バッシングされる、これではリス

クが大きく感じられ、なかなか前には進めません。むしろ、できたときに評価する、感謝する、このようにポジティブなフィードバックをしていくことで、特定分野で尖った人材を育てていくことができるのではないかと考えています。

また、企業の再チャレンジ支援の促進は重要です。今の日本は残念ながら「復帰不可能社会」だと思います。履歴書に空白ができると復帰はなかなか難しくなります。しかしキャリアに空白ができた人々も積極的に登用し、支援する企業の取り組みが重要となります。

最後に、自己肯定感を持てるような教育とセーフティネットの構築です。失敗しても立ち直ることができる、自分を受け入れる力、肯定する力を、「他者との繋がりや関係性の中で」感じられるような、日本型の自己肯定感。こういうものを培っていく必要があると思います。そして、失敗者には手を差し伸べるような仕組みを構築することが必要です。

私は、人は変わることができると思います。復帰はすぐにはできなくても、待つことによって、新たな芽を育むことができると思います。こうしたライフコースの多様性を活用できるような、文化的基盤の構築が今の日本には求められているのではないのでしょうか。

2. 意見交換

(稲田大臣) 再チャレンジをするには、はじめの一步を踏み出す勇気が重要であり、一步踏み出すことができれば、8合目くらいにきているのではないのでしょうか。これができなくてニートが70万人に上ることの一因になっていると考えますが、社会全体としてこうした人を疎外せずに支援することが重要であると考えますが、いかがでしょうか。

(兼松氏) 始めに就職した小売業界には逆風が吹いていたが、介護業界には追い風が吹いていました。社会福祉法人に引っ張って下さった伊東理事長は、風を読んで逆らわないことが重要とおっしゃっており、私の場合は、皆さんの支援も追い風となりました。

(安倍総理) 介護業界は離職率が高い業界といわれていますが、兼松さんの場合、業界に入ってどう感じますか。

(兼松氏) 私の所属する所は、研修などでゆっくりと知識をつけてもらったので、非常に有り難かったです。

(安倍総理) 横田さん、日本では、個人保証の問題もあるし、一度会社を潰すとなかなか相手にしてもらえないと思いますが、一番苦勞するのはやはりファイナンスでしょうか。

(横田氏) はい、今そこで一番苦勞しています。クラウドファンディングを使ったり、お金を借りなくてもできるよう、使える制度は利用しています。一度に仕入れたりするときは、どうしてもお金が必要となりますので、担保もない状態だとなかなか借りられません。破産後5年も経っていないので、借りられず非常にきつい状態です。

(安倍総理) 近江さんはずっと漁業をやっておられて、今は都市と農村漁村を行ったり来たりしてアドバイスをを行っているのでしょうか。

(近江氏) 都会の子ども達を農村に連れてきて体験をさせています。体験して初めて分かることがたくさんあります。体験するだけでなく、体験した後にそれをきちんと整理していく。修学旅行で大阪の高校生を受け入れたりもしています。大阪の高校生が十勝に来て、農村の生活体験をして、そして学校に戻った後、学校の学びの中で、価値というものを深めてもらうという取組をしています。

(安倍総理) 小泉政権時代、オーライ・ニッポンという都市と農村の交流企画がありましたが、今でもやっているのでしょうか。

(近江氏) はい。是非、大きく打ち出してほしいと思います。

3. 安倍総理締め括り挨拶（以降、プレス入り）

政界というのは割りと再チャレンジ可能な社会です。左側にいる寺田さんも山際さんもこの間まで落選していて、加藤副長官も落選の経験者で、私の父親も落選したのですが、私自身も総理を辞めるともう2度とないと言われておりまして、私の病気に合った画期的な新薬ができるなど幸運にも恵まれまして、私ももう一度、総理に復帰することができたわけです。しかし、社会全体は、さきほど内田先生がおっしゃったように、なかなかそういう経験者を受け入れにくい。

今日、皆様のお話を伺っていて、そうした1回、2回、3回という失敗、あるいはまた障害がある、そういう壁を乗り越えていくということが大変難しい社会であるということは、改めて分かった次第です。

皆様の話を聞いて、再チャレンジ政策を進めていく上において、何が大切か、何が問題か、という様々なアドバイスをいただいたような気がしております。また、改めて御礼を申し上げたいと思います。

「活力ある日本」を作り上げていく上においては、今日、お話を伺っていて、失敗あるいは障害という壁にぶつかった経験というのは、大いなるキャリアだと思います。そういう方々をしっかりと活かしていく社会であって初めて、全員が参加するということによって、日本は活力を取り戻していけることができるのだらうと思います。

今日、お集まりいただいた皆様はそうした壁を突破されたのですが、実際はなかなかその壁を突破しようと苦しんでいる方の方が圧倒的に多いのだらうと思います。つまり、日本はそういう人材を活用していない。そういう皆様にとって、人生の目標に向かって進んでいくことが、なかなかできていない社会だということを、我々ももう一度よく認識をしながら、どうすればそうした障害を取り除く、ハードルを取っていくことができるのか。そういう方々の背中を押すことができるかどうかということが、我々の仕事なののだらうと思います。

その中でいくつかスタートして行きたいと思います。

ニート等の若者の皆様についても、就労した後のキャリア・アップも大切だということを今日、承知したわけで、こうしたニートの方のキャリア・アップ支援のための事業を開始していこうと思います。

さらには、行き過ぎた個人保証が再チャレンジを妨げています。一回失敗したら烙印が押されるわけですが、ウォルト・ディズニーは5回会社を倒産させているわけですが、ウォルト・ディズニーが日本にいたら、ディズニーという大きな会社ができなかったということでもありますから、一定の条件を満たす場合には、経営者の保証を求めないとするガイドラインを策定していきたいと思います。また、オリンピック、パラリンピック、それぞれ文科省と厚労省という分け方がいいのかということも考えていく。

障害者の皆様に対するきめ細かな就労支援ということも極めて必要でございますから、それを推進してまいります。このため、障害者が就労する企業への発注拡大を進めていきたいと思えます。

今後、稲田大臣を中心に関係各省庁において、今日の皆様のご意見を踏まえながら、施策の実施に努めていきたい。そのことによって、若者も女性も男性も失敗した人も、障害がある方にとっても、ハードルのないチャレンジのできる社会にしていきたいと思えますので、今後ともアドバイスを、どうぞよろしく願いいたします。

4. 出席者から稲田大臣への色紙手交

(寺田副大臣)

本日お集まりの皆様には、皆様の再チャレンジに対する思いを、色紙にしたためていただき、稲田大臣が順番に皆様の元を回りますので、一言いただきながら、お渡しいただきたいと書きます。

いただいた色紙は、様々な事情や障害でお困りの方、あるいは、これから再チャレンジをしようとしている方への応援メッセージとして、後日官邸のホームページに公表いたします。

(横田氏) 将来、生涯を振り返ったときに、この人のためにという目的をもったものづくりを大切にしたいと思えます。

(兼松氏) 「ありがとう」と言われ、「ありがとう」と言える福祉・介護の仕事を再チャレンジの架け橋にしたいです。

(大日方氏) チャレンジする人にはパワーと勇気を与える施策をお願いしたい。また再チャレンジを妨げない暖かく前向きな成熟した社会になるよう願っています。

(尾野山氏) 若者が一歩踏み出しやすいような環境を作っていただきたいです。

(近江氏) 農林漁業が国民みんなの自分事であると感じられるように、体系的に位置付けられた農村生活体験を軸とした教育の取組について、さらに全国で進めることができるよう施策を展開していただきたいです。

(内田氏) 社会と心の双方が、両輪になって変わっていくことが大切だと思います。再チャレンジする方がいきいきと生きる未来に向けてよろしくお願いします。